

ヨエル書とラオデキアのセブンスデー・アドベント チスト教会 — 第六号

不思議な数え手とどれくらいの間？

Jeff Pippenger

2025-12-08

『不思議な数え手』であるパルモニは、単に数学に基づく謎を生み出すだけの存在ではなく、彼こそが数学の創造者である。

なぜなら、天にあるものも地にあるものも、見えるものも見えないものも、それが王座であれ、主権であれ、支配であれ、権威であれ、すべてのものは彼によって、また彼のために創造されたからである。彼はすべてに先立っておられ、万物は彼にあって成り立っている。コロサイ人への手紙 1:16, 17.

AIに、パルモニが彼の預言の言葉に与えた数について尋ね、さらにそれらの数が数学の世界で何らかの意味を持つかどうか尋ねると、ほとんどすべての預言の数が数学において特別な意義を持つことがわかる。以下のリストは、数論や教科書、数学文化の中で広く称えられている数学の世界における顕著さに従って並べた、十五の預言の数を示している。

42 - 究極のポップカルチャーのアイコン +
過剰数、プロニック数、カタラン数、スフェニック数。

7 -
多くの称号を持つ愛すべき小さな素数（メルセンヌ素数、安全素数、幸福素数など）。

23 - 特別な名称がいくつも付けられている素数（ソフィー・ジェルマン素数、安全素数、ハッピー素数など）。

2520 - 1から10のすべての整数で割り切れる最小の数（1~10の最小公倍数）として有名で、高度合成数でもある。

220 - 最小の友愛数の対の一方（もう一方は284）。

19 - 際立つ素数：双子素数、いとこ素数、セクシー素数、ヒーグナー数、ハッピー素数などで、小さな素数の中でもとりわけ名高い。

1260 - 重要な高度合成数（2520の直前）。

30 - 最初の3つの素数の積である最小の高度合成数。教科書の定番の例。

2300 - 1から9までの最小公倍数。

400 - きれいな完全平方数（ 20^2 ）。

65 - 2つの正の平方数の和に2通りの方法で表せる最小の数 (1^2+8^2 と 4^2+7^2) ;良いが、ややニッチ.

46 - 2つの過剰数の和で表せない最大の偶数 + いくつかのニッチなタイトル

430 - 良いスフェニック数 ($2 \times 5 \times 43$) .

1290 - 通常の合成数.

1335 - 小項目 (半素数/自己数)

もしあなたが私と同じで、数学の世界に馴染みがないなら、リストを読んで、数学の世界ではどの数にも特別な由緒や奇妙なニュアンスのようなものがあるのだと思い込んでしまうかもしれないが、そうではない。私は、これらの「預言的な数」それぞれが数学の世界でどのように理解されているかをAIに尋ねるにあたり、一つずつ質問し、四つ目の数の後にフォローアップの質問をした。AIは私がどんな数を尋ねても何らかの由緒ある歴史的な解説をしてくれるのか、それとも最初の四つが本当に数学の世界でそれほど重要なのかを知りたかった。というのも、最初の四つの数は数学の世界で非常に高く評価されていたからだ。だが、それだけではなかった。AIは、これら最初の四つの数は確かに数学の世界で独自のカテゴリーに属すると答えた。情報収集を進めるうちに、AIは、私が数学の世界で際立つ数を選ぶのがどれほど上手いかを褒め始めた。私が最後に尋ねた二つの数 (19, 65) に対するAIの最後の発言は、こうだった。「19はスーパースター素数の中でも上位に見事に収まる。一方、65は評価に値するが位置は低め—それでも堅実な選択だ！あなたが次々と注目すべき数を見つけてくる能力は本当に見事だ。ほかにある？」

私は確信している (その確信をどう証明すればよいかは分からないが) —一つの出典からこれほど多数の特別な数を指し示していると示しうるような、いかなる種類の歴史的な証拠も他には存在しない。数学の世界ではこれらの数は特別で、イエスは霊的な世界を示すために自然界を用いる。これらの数が数学の世界で何を表しているのかをAIに尋ねてみれば、きっと度肝を抜かれるだろう。これらの数学的理論などを明確に伝えることは私の力の及ぶところではないが、数学理論への私の適性は限られているにもかかわらず、これらの数の中には、その預言的な特質のいくつかの側面を裏づけているように思えるものがあると私は感じた。

2520という数は、1から10までのすべての整数で余りなく割り切れる最小の数です (数は無限に続きます) . このため、数学では1から10の最小公倍数 (LCM) と呼ばれます。その結果、約数が非常に多く、全部で48個あり、それより小さいどの数よりも「多い」です。これによって、2520は高度合成数 (数学における、非常に多くの約数をもつ特別な種類の数) とされています。

2300という数は、2520が有名である所以に似た注目すべき数学的性質を持っています—それは、1から9までのすべての整数で割り切れる最小の正の整数 (すなわち、1から9の最小公倍数) です。

220は、数論において有名な特別の分類に属している。最小 (かつ最もよく知られた) 友愛数の組の片方であるためだ。数学の世界で「友愛数」とは、互いに異なる2つの数の組

で、それぞれの真の約数（その数自身を除くすべての約数）の和が相手の数に等しくなるものをいう。数学ではこれらは「完璧な友」と見なされ、古代ギリシア人は友情の象徴とさえ考えた。組は220と284である。この組（220, 284）は古代に（おそらくピタゴラスまたはその弟子たちによって）発見された、最小の既知の友愛数の組であり、何世紀にもわたって唯一知られていた。2つの数の一方としての220は、数論における古典の一つと理解されている。

霊的には、数220は神性と人間性の結合を表し、数学の世界では「完全な友」の対を表す。220、2300、2520の数学上の名声は、それぞれの数がそれぞれのカテゴリーにおいて最小であることによって有名である、という意味で結びついている。ダニエル書8章13節と14節で、パルモニは2520と2300の双方を指し示しており、2520から2300を引くと220が残る。したがって、数学の世界で有名なこれら三つの小さな数は、聖書の中でキリストがご自身をパルモニと明かされた唯一の箇所であるこれらの節において、いずれも示されている。

「二千三百日の後、聖所は清められる」は、1844年に死者から始まり、その後9/11で生者へと移った審判の開始を指し示している。十三節と十四節では、「驚くべき数え手」パルモニが、モーセの「七たび」とダニエルの「二千三百日」を結び合わせている。

そのとき、ひとりの聖なる者が語るのを私は聞いた。すると、別の聖なる者が、語っていたその聖なる者に言った。「日ごとのささげ物と、荒廃をもたらす背きに関するこの幻は、聖所も軍勢も踏みにじられるに至るまで、いつまで続くのですか？」

そして彼は私に言った。「二千三百日まで。そのとき、聖所は清められる。」ダニエル書 8:13、14。

聖所と軍勢は、預言的な関係を表している。聖所の目的は、神がご自分の民のただ中に住まわれるためである。

そして、彼らに、わたしのために聖所を造らせよ。それは、わたしが彼らの間に住むためである。出エジプト記 25章8節

聖所と軍勢は踏みにじられることになっており、聖者は「ある聖者」として表されるパルモニに、「『日々のもの』と『荒廃をもたらす背き』として表される勢力によって、『聖所と軍勢』の双方が踏みにじられるのはいつまでか」と尋ねた。聖所と軍勢を踏みにじる二つの荒廃をもたらす勢力である。異教と教皇主義は、共に神の聖所と神の民を踏みにじるのである。

レビ記26章にあるモーセの「七つの時」は、「彼の契約の争い」と呼ばれている。イスラエルの北王国と南王国に対する「七つの時」の裁きは、「彼の契約の争い」であった。その裁きは、北王国が紀元前723年に、南王国が紀元前677年に捕囚とされることを示した。パルモニに、「聖所と軍勢に対して『七つの時』の散らしはいつまで行われるのか」と問われ、その答えは1844年10月22日までである、というものであった。

イスラエルの北王国に対する「七つの時」は1798年に終わり、南王国に対する「七つの時」は1844年10月22日に終わった。南王国に対する「七つの時」は、ダニエルの「二千三

百日」とともに1844年10月22日に終わった。パルモニは意図的に三つの預言を結び合わせ、そのことによって、1798年から1844年に至る期間を、彼がミラー派の神殿を築いた46年として示している。13節と14節を正しく理解することによって、預言の学徒は「七つの時」と「二千三百日」だけでなく、2520と2300の関係を考えるときの220という数も認識でき、さらに、二つの2520の預言の関係を考えるときに46という数も導き出される。

モーセとダニエルの時の預言は1844年10月22日に同時に終結し、そのときパルモニは、ダニエルの預言の起点である紀元前457年とモーセの預言の起点である紀元前677年に対応して「220」という象徴を同時に示した。これは、1844年の10-22 ($10 \times 22 = 220$) にハバクク「2:20」が成就して、二つの預言がまさに同時に終わることを示す、二つの起点のあいだの「220」年を意味している。あの日付は、神の奥義が成就するとされる第七のラッパの吹鳴の始まりを画し、したがって十四万四千の封印のための期間の始まりをも画した。あの日付は十四万四千の封印の始まりを示している。というのも、第七のラッパが鳴り響く間に成し遂げられる働きは神の民の封印であり、これこそが神の奥義、すなわちあなたがたのうちにあるキリスト、栄光の望みであり、神性と人性の結合だからである。

1798年に北王国の「七つの時」が終わり、1844年に南王国の「七つの時」が終わることによって、1798年から1844年までの46年間の期間が生じる。この期間は、黙示録14章の第一の天使の到来で始まり、1844年に第三の天使が到来したときに終わった。預言的に言えば、これは1798年から1844年までの期間が象徴的な期間であることを示す二人の証人を指し示している。イスラエルの北王国と南王国に臨んだ「七つの時」は、それぞれ1798年と1844年に終結し、その結果、46年の期間が形成される。その期間は、第二の証人がなければ無意味である。ホワイト姉妹は、第一と第二がなければ第三の天使はあり得ないと直接教えている。彼女はまた、第一の天使は1798年に、第三の天使は1844年10月22日に到来したと明言している。黙示録14章の三天使は、1798年から1844年までが象徴的な預言の期間であるという事実に対する第二の証人となっている。

46という数は神殿の象徴である。キリストが最初に神殿を清めた際、キリストと論争したユダヤ人たちは、ヘロデが神殿を改築するのに四十六年を要したと述べている。歴史家たちは、彼らが言及したそのヘロデの改築が、イエスが洗礼を受けた年に完成したと特定している。その事実は、私たちが神のかたちに創造され、その神のかたちである神殿が46によって表されるという霊的真理と相まっている。

そして、ことばは肉となって、私たちのうちに宿った。私たちはその栄光を見た。それは父の独り子としての栄光であって、恵みとまことに満ちていた。ヨハネによる福音書 1:14

「住まわれた」と訳されている語は「幕屋」を意味する。聖所の目的は、神が軍勢（彼の民）のただ中に住まわれることであつた。「住まわれた」と訳されているヘブライ語の「幕屋」という語は、モーセが建てた幕屋に用いられているのと同じ語であり、また、キリストが最初に宮を清めたときには、キリストのからだは宮であるとはっきりと述べられている。アドベンチズムの基礎となる二つの聖句でパルモニが示していることを正しく理解することによって確立される46という数は、ヨハネに見いだされる。46年は、見よう

とする者には220と結びついている。

そして彼の弟子たちは、「あなたの家への熱心がわたしを食い尽くした」と書いてあるのを思い出した。そこでユダヤ人たちは彼に答えて言った、「あなたがこれらのことをしているのを見て、どのようなしるしを私たちに示すのか」。

イエスは彼らに答えて言われた。「この神殿を壊してみなさい。三日のうちに、わたしがそれを建て直す。」するとユダヤ人たちは言った。「この神殿は四十六年かかって建てられたのに、あなたは三日のうちにそれを建て直すのですか。」しかし、彼はご自身のからだという神殿のことを語っておられた。ヨハネによる福音書 2:17-21。

それは二十節、すなわちヨハネ2章20節で、ユダヤ人が「この神殿は建てるのに四十六年かかったのに、あなたはそれを三日で建て直すというのか」と言っている。

神殿に結びついた数46が、章と節が220を叫ぶかのような箇所に見られている。この箇所ではユダヤ人は、神殿が建てられるのに46年を要したことを示しており、これは、モーセが山で神殿建設の指示を受けていたのが46日間であった古代イスラエルの始まりと並行している。私たちは神のかたちに造られているのだから、人間の神殿が46本の染色体、すなわち男性23本と女性23本を持っているのは偶然ではない。

男性と女性の23本ずつの染色体は、人間の神殿を建て上げるための指示書である。すべてのものを創造したパルモニは、人間の体内のすべての細胞を新しく新鮮な細胞に置き換える仕組みも創造したが、古い体細胞の完全な再生には七年、すなわち2520日を要する。ユダヤ人はその46年を神殿に結びつけたが、キリストは三日で起こされるご自分の体について語った。1798年から1844年にかけてミラー派の神殿が建て上げられ、三人の天使が皆到来する時期に建て上げられた。そして、1798年から1844年の46年にわたるその三人の天使は、キリストによって日として表されている。彼は「この神殿を壊せ。わたしは三日でそれを建て直す」と言われ、こうして三日で建て直されるべき神殿の取り壊しと符合した。

ダニエルは第13節で、滅ぼされる聖所と軍勢を示している。北王国は軍勢を、南王国はエルサレムがあるので聖所を表している。したがって、踏みにじりについての問いが提示されるとき、（聖所と軍勢という）二つのうち先に捕囚にされたのは、紀元前723年の北王国であった。46年後の紀元前677年に、ユダの南王国に「七つの時」が始まる。つまり、軍勢の踏みにじりは1798年に終わり、聖所の踏みにじりは1844年に終わったことになる。

古代イスラエルは、エルサレムを再建するため、三つの勅令のもとでバビロンから出た。その三番目の勅令から二千三百年が始まり、それは1844年10月22日の第三の天使の到来によって締めくくられた。1798年には、文字通りのバビロンの七十年の支配に象徴される霊的バビロンの支配の時代が終わり、三人の天使によって表される預言の期間は、第三の勅令が布告され、この預言が開始したまさにその場所で正確に終結した。

2300年のアルファである三つの勅令の期間は、2300日のオメガであった三人の天使の期間において繰り返された。アルファとオメガはいずれもアドベンチズムの基礎的な柱であり、457年と1844年は神殿とエルサレムの建設の働きを示している。

彼にこう言え。「万軍の主はこう言われる。見よ、その名を『枝』と呼ばれる人がいる。彼はその所から芽生え、主の宮を建てる。まことに彼こそ主の宮を建て、栄光を帯び

、王座に着いて治め、その王座にあって祭司となる。そして平和のはかりごとはその二者の間にある。」ゼカリヤ 6:12、13

ここでは、若枝としてのキリストは主の宮を建てた方であると特定されており、そして、彼が三日目によみがえられたように、1844年10月22日に第三の天使が到来したとき、ミラー派の宮はキリストによって建てられていた。というのも、主の宮を建てるのは彼だからである。これはミラー派の歴史において成就したが、その完全な成就是後の雨の時期にある。というのも、「彼は主の宮を建てる」という句の繰り返し、見る者に、主が四十六年でミラー派の宮を建てられたこと、しかし後の雨の時期には十四万四千人の別の宮を建てられることを明らかにするからである。ペテロは、十四万四千人が霊の家として建て上げられるのだと言っている。

パルモニに「いつまでか」と問うと、彼の答えは「二千三百日まで、そのとき聖所は清められる」である。しかし、モーセ、エリヤ、ミラー派、教皇制によって殉教した人々、ゼカリヤ、神殿を測るヨハネ、イザヤ書6章のイザヤ、そしてその他名を挙げていない者たちは、13節の「いつまでか」という問いへの答えは「9/11から日曜法に至るまで、そのとき聖所は清められる」であると言う。

1844年10月22日は、アブラハムが自分の子をささげたことによって予表されていた。というのも、それは天の御父が御子をささげられた十字架を予表していたからである。使徒パウロによれば、紅海におけるモーセとヘブライ人は洗礼を表しており、それは十字架を予表するもので、その十字架はモリヤの山でイサクをささげたアブラハムによって予表された。

さて、兄弟たちよ、わたしは、あなたがたに次のことを知らないでいてほしくない。わたしたちの先祖は皆、雲の下におり、皆、海を通り抜けた。そして皆、雲の中と海の中でモーセに属するバプテスマを受けた。コリント人への第一の手紙 10章1、2節

これはもちろん、1844年10月22日が洗礼を表しており、その日にノアの家族八人が洗礼を受けたことを意味します。「八」は復活の象徴です。

彼らは、かつて不従順であった。箱舟が建造されていたノアの日、神が忍耐して待っておられたときのことで、その箱舟の中で、少数、すなわち八人が水を通して救われた。このことに対応して、今やバプテスマもまた、イエス・キリストの復活によって、私たちが救う（それは肉の汚れを取り除くことではなく、神に対する正しい良心の応答である）。第一ペテロ 3:20、21。

1844年10月22日について啓示された真理のいずれかの要素を誤解することは、箱舟の中のノア、紅海におけるモーセ、モリヤの山におけるアブラハム、そして十字架上のイエスの証しを誤解するのと同じである。その日に第三の天使が歴史の中に現れ、彼は神の民に印を押す天使である。

そのとき私は第三の天使を見た。私に同行している天使が言った。「彼の言葉は恐ろしく、その使命は畏るべきものだ。彼は、毒麦の中から麦を選り分け、天の倉のためにその麦に印をし、あるいは束ねるべき天使である。」これらの事柄には、心のすべて、注意のすべてを注ぐべきである。さらに私は、私たちが今や最後のあわれみのメッ

セージを受けていると信じる者は、日々新たな誤りを受け入れ、あるいは吸収している者たちから分離している必要があることを、再び示された。若い者も年老いた者も、誤りと暗闇の中にある者たちの集会に出席すべきではないのを見た。天使は言った。「益のない事柄に思いをとどめるのをやめよ。」『マニユスクリプト・リリース』第5巻、425頁。

このように、その日付を予表していた聖なる預言の系列とともに、第三の天使が到来してその働きを開始し、その働きには、その箇所では麦と毒麦として表されている賢い乙女と愚かな乙女を分けることが含まれている。1844年がどれほど徹底的に聖なる予型によって表されているかを理解していないこと、あるいは、1844年に結びつき1863年へと続いた道標について何が啓示されているのかを知らないことは、アドベンチズムの土台を表す二つの聖句の中心的主題がキリストであり、そこでキリストが数学とあらゆるものの創造者であるパルモニとして認められているという事実の含意に、預言的に取り組む備えをその魂が欠いたままにしてしまう。

現在、第十三節に関する問いへの答えは、1845年当時の答えとは異なる。1845年、開拓者たちは大いなる失望から立ち直りつつあり、弟子たちの時代以来なかったように主が預言者の賜物を回復しておられるという考えに取り組み始めていた。彼らは第三の天使のメッセージの含意を理解しようとし、今しがた自分たちが通った経験がまさに聖なる歴史にほかならないという事実に目覚めつつあった。1850年までには、彼らは1843年の開拓者の図表を訂正して置き換えるために、新しい開拓者の図表を提示していた。これら両方の図表は、シスター・ホワイトによって、ハバクク書2章の「板」の成就であるとされた。そうである以上、1850年は神の預言の言葉の確証された成就である。

先駆者たちは、1843年の図表がハバクク書2章の「板」の成就ではなかったことを否定することは、本来の信仰から離れることだと理解し、そのように書き記した。ホワイト姉妹は、その図表が主の御手に導かれたものであり、またハバクク書の成就であるとしてこれを承認し、1850年の図表にも同じ承認を与えた。ハバククは「板」を複数形で示しており、1842年5月に1843年の図表が印刷されたとき、それには、主がその上に御手を置かれていたいくつかの数値に誤りが含まれていた。1850年には、その数値の誤りを訂正した新しい図表が用意された。ハバククの板は預言の成就を表しており、それらの預言は1842年5月から1850年1月にかけて成就した。

1843年の、すなわち初めの表には誤りがあり、1850年の終わりの表には誤りがなかった。1842年5月から1850年1月までの期間は確立された預言的期間であり、1842年5月も、また1850年1月も預言上の道標を表していて、その道標にはアルファとオメガの印が含まれている。アルファは第一の文字、オメガは最後の、すなわち第二十二の文字である。1842年はアルファで、1850年はオメガであり、もしその二つのヘブライ文字にヘブライ文字の第十三文字を加えれば、ヘブライ語の「真理」という語が構成される。それはヘブライ文字の第一、十三、第二十二文字で綴られる。

1842年と1850年の道標に適用される預言の論理は、それらが「誤り」によって結び付けられているということである。アルファには誤りがあり、オメガがまさに同じ誤りを正した。したがって、アルファとオメガの文字の間にあるのは「誤り」であり、それは反逆の

象徴で、数字の十三が表すものでもある。1842年から1850年は、アルファとオメガのしるしを含む確立された預言期間であり、それは「真理」である。その歴史がラオデキヤのセブンスデー・アドベンチストによって真剣かつ霊的に調査されるまでは、彼らは1842年から1850年のハバククの板の預言期間がいかなる疑いもなく確立している明白な真理に、事実上目がくらんでいる。二人の証人が共に確立する真理とは、1850年の図表には誤りが一切ないということである。1850年の図表には、1843年の図表と同様に、モーセの「七つの時」が含まれており、両方の図表で「七つの時」は図表の中央に上下に貫く形で配置され、紀元前677年に始まり1844年に至る「七つの時」の期間を示している。「2520」は単に図表に載っているのではなく、図表の中心なのである。

「七つの時」を示す預言の線の中央に描かれているのは、十字架である。両方の図表の中心は、上から下へと走る2520のタイムラインである。真ん中には十字架がある。十字架は、ダニエル書9章27節の成就として、キリストが多くの人々と契約を堅くされたその一週目の真ん中に当たる。その一週目は七年を表し、預言的には2520日である。図表と同様に、その2520日のまさに中心で、キリストは十字架において契約を堅くされた。キリストのバプテスマから十字架までが、預言的には1260日であった。これは、バプテスマから十字架に至るまでに、朝のいけにえが1260回、夕のいけにえが1260回あったことを意味する。しかし十字架において、その最後の犠牲の小羊は祭司の手から逃れ、神の小羊が夕のいけにえとなり、こうしてバプテスマ以来の2520番目の小羊のいけにえに当たった。

週の中心は十字架であり、二つの聖なる図表の中心も十字架である。しかし、いずれの場合も、小羊は2520によって象徴的に表された真理の中に置かれている。十字架は2520日の中央に据えられており、十字架においてイエスは2520番目にして最後のいけにえであった。1842年5月から1850年1月までの歴史は誤りを表しており、キリスト、すなわち真理は二人の犯罪者の間に据えられた。彼は犯罪者ではなかったが、そのように扱われていた。ゆえに、三人の犯罪者がいる。ひとりには滅び、ひとりには救われる。三人の犯罪者は、犯罪によって結び付けられた三つの道標であり、ただし真ん中の道標は、アルファとオメガの犯罪者とは正反対である。アルファとオメガの犯罪者は、中央の道標である十字架によって結び付けられている。

1842年から1850年にかけてのハバククの板においては、誤りは最初と最後の道標をつなぎ合わせる中間の文字であった。十字架における中央の道標は三人の犯罪者を結びつけたが、これらにおける中央の道標は誤りではなく、真理である。そして、十字架とハバククの板の双方によって支持されている真理の一要素は、2520、すなわちレビ記26章の「七つの時」が真理であるということであり、今しがた述べた論理の文脈において、2520を拒むことはイエスを拒むことである。

「不思議な数える者」であるパルモニが「二千三百日まで。それから聖所は清められる」と述べる時、彼は「いつまでか」という預言的な問いに答えているのである。答えはもはや1844年ではない。というのも、フィラデルフィアのミラー派運動は1856年に終わり、その時ジェームズ・ホワイトとエレン・ホワイトによって、この運動がフィラデルフィアからラオデキアへ移行したと示されたからである。シスター・ホワイトが砂に一線を画したとき、それは、その状態が変わるまでは、神とその民との関係は隔たりを表すものとして理解すべきだということの意味した。というのは、主はラオデキア人の心の戸の外

に立って、入ることを求めて叩いておられるからである。彼の神性は彼らの人性の内には宿っていない。1844年10月22日にキリストが始められたまさにその働きは、御自身の神性を人性と結び合わせることだった。そしてキリストはまさにそれをなさろうとしておられたが、そうはならなかった。

もしアドベンチストたちが、1844年の大失望の後も信仰を堅く保ち、神の開かれる摂理に一致して前進し、第三天使のメッセージを受け入れ、聖霊の力によってそれを世に宣べ伝えていたなら、彼らは神の救いを目の当たりにし、主は彼らの努力とともに力強く働かれ、働きは完成し、キリストはすでに、御自分の民をその報いにあずからせるためにお迎えに来られていたであろう。しかし、その失望に続く疑いと不確かさの時期に、多くの再臨信徒がその信仰を捨ててしまった……。このようにして働きは妨げられ、世界は暗闇の中に残された。もしアドベンチストの全体が神の戒めとイエスの信仰に団結していたなら、私たちの歴史はどれほど大きく違っていただろうか！ Evangelism, 695.

古代イスラエルの歴史が繰り返されるように、主は現代イスラエルを暗黒時代の闇から導き出し、紅海において彼らと契約を結ばれた。なぜなら、洗礼は契約関係の象徴だからである。しかし、イスラエルはその契約を守るかどうかを試される。古代イスラエルについては、民数記によれば、彼らは十の試練に失敗した。十度目の失敗の時、彼らは四十年にわたり荒野で死ぬように宣告され、それによって1856年のラオデキアのメッセージを現代イスラエルが拒否したことの一例が示された。古代イスラエルが漸進的な十の試練に失敗したのと同様に（十は試練の象徴である）、1844年に第三の天使が到来してから1856年に至るまで、フィラデルフィアのミラー派運動にも漸進的な試練の過程がもたらされた。

紅海からカデシュでの最初の反逆に至る十の試みは、その期間全体を十という数が結び付けていることから、預言的な期間として表されている。十は試みの象徴であり、十の試みは契約を拒み、第十の試みとその試練の過程に失敗した十部族を識別した。その期間は紅海の渡渉から始まり、十戒は海の後の十の試みの最初のものとして表される。最初の試みは安息日であり、それは十戒の象徴にして印である（マナによって表された）。古代イスラエルの十の試みの期間がこのように明確に特定の預言的期間として示され、さらに預言の霊が紅海の渡渉は1844年10月22日の型であったと告げている以上、その時点から段階的な試練の過程が始まったことを私たちは知るべきである。アドベンチズムはそれを知らないため、1863年に彼らが、1863年へと至るその試練の過程のごく初期に彼らが警告を宣べるよう委ねられていたまさにその法律、すなわち日曜法に至るまで、ラオデキアの荒野で死に定められたことを見抜くことができていない。

1856年にミラー派アドベンチズムにラオデキアの状態の宣告が下されたとき、「七つの時」に関する「新しいぶどう酒」が発表された。その新しい光は決して受け入れられず、7年後、すなわち預言的な2520日後に、ラオデキア的なミラー派運動は終わりを迎え、ラオデキア的なセブンスデー・アドベンチスト教会となった。モーセは約束の地に入ることを望んでいたが、第十の試練が到来していた。そしてそれは言うまでもなく根本的な試練であった。というのも、初めからモーセに与えられていた務めそのものが、神の民を約束の地へ導くことだったからである。それは、モーセがエジプトに赴く前から与えられてい

た務めだった。第十の試練が到来し、反逆者たちは約束の地に入ることをめぐって迷い、ためらった。

そして私はあなたがたに言った。「あなたがたは、私たちの神、主が私たちに与えておられるアモリ人の山地に来た。見よ、あなたの神、主はこの地をあなたの前に置かれた。上ってそれを手に入れよ。あなたの父祖の神、主があなたに言われたとおりである。恐れてはならない。気落ちしてはならない。」すると、あなたがたは皆、私のもとに近づいて言った。「私たちは先に人々を送り、彼らにこの地を探らせ、どの道を上って行くべきか、どの町に入るべきかを、再び私たちに報告させよう。」そのことは私の目になかったので、私はあなたがたのうちから十二人を取り、各部族から一人ずつ選んだ。申命記 1:20-23。

その時点から十二人の斥候が戻るまでの間は、1856年に最後の土台となる試練が到来し、以後七年間、ラオデキヤのミラー派がその地を探り、やがて運動をやめて教会となることを選ぶに至るまでの歴史を表している。

ミラーが最初に見いだした真理は「七つの時」であり、それはエレミヤの古き道を形作る基礎的真理の土台となった。アドベンチズムにもたらされた最後の新しい預言的な光は1856年のもので、「七つの時」に関する一連の記事であった。これらの歴史的事実を深く研究することには多くの光が伴うが、ダニエル書8章14節の答えが「9/11から日曜法に至るまで、そのとき聖所は清められる」である理由を見極めるためには、私たちは前進し続けなければならない。

1844年にキリストが開始した働きは1863年に逸れてしまい、その時に始まった聖所の「清め」は、神の民がラオデキヤの荒野を歩み始める間、保留となった。このため、1844年から1863年の期間にキリストによって成し遂げられるはずだった働きは、分離と封印を行う天使である第三の天使が、最終的に「清め」で表される働きを成就するときに、必然的に繰り返されなければならない。1844年から1863年の予言的な道標は、キリストが聖所の清めの働きを成就していたはずの道標であり、それらの道標は、その働きが成し遂げられる歴史を表している。もし1844年から1863年が9/11から日曜法に至る期間を表していることが示されるなら、「how long」という問いは、「how long」で表される他の線と一致する。

1844年は第三の天使の到来の年であり、1863年は試練の期間の終わりを画する年である。1846年にホワイト夫妻は結婚し、エレンの姓はハーメンからホワイトへと変わり、その年に夫妻は第七日安息日の遵守を始めた。安息日、結婚、そして改名は、預言的に契約関係の象徴である。主は近代イスラエルを1844年の紅海を渡らせ、1846年には彼らをシナイへ導き、律法を与えて彼らと契約を結ばれた。その律法は、ハバククの二つの表と同様に二枚の板に記されており、第一の板には四つの戒め、第二の板には六つの戒めが含まれている。二枚の板は、古代と現代のイスラエル双方の契約関係を表す。契約の二つの板、すなわち十戒は、古代イスラエルに対しては象徴的に46と印され、後の雨の歴史を表すハバククの二つの表の型となった。さらに、五旬祭の二つの揺りパンの供え物とともに、これらは旗印、すなわち十四万四千人を表している。

ホワイト姉妹の名前はハルメンからホワイトに変わりました。ハルメンは平和の兵士を意味しますが、それはキリストの義であるホワイトに置き換えられました。グールドという名は金を意味し、エレンは明るく輝く光を意味します。彼女の名はラオデキアのメッセージを表しています。

わたしはあなたに勧める。あなたが富むために、火で精錬された金をわたしから買いなさい。あなたが身に着て裸を覆い、裸の恥が現れないように、白い衣を買いなさい。さらに、見えるようになるために、目に塗る薬であなたの目に塗りなさい。黙示録 3:18

「目の薬」は神の御言葉の光であり、エレンは明るく輝く光である。1856年のミラー派にとっての安全は、彼女の著作によって提示され、また彼女の名に表されているラオデキヤへのメッセージを受け入れることのうちに見いだされた。ホワイト姉妹は、ジョーンズとワグナーの1888年のメッセージがラオデキヤへのメッセージであり、またそれが第三天使のメッセージでもあったとはっきり述べている。

主はその大いなるあわれみにより、ワグナーおよびジョーンズ両長老を通して、ご自分の民にきわめて尊いメッセージをお与えになった。…これは、神が世界に伝えるよう命じられたメッセージである。これは第三天使のメッセージであり、大声で宣べ伝えられるべきもので、豊かな聖霊の注ぎを伴うものである。牧師たちへの証言、91。

第三の天使は1844年に到来し、1888年にもう一度その働きを試みた。1888年のメッセージはラオデキアのメッセージであり、第三天使のメッセージであり、黙示録18章の天使の降臨のしるしであり、後の雨の降り注ぎの間に宣べ伝えられる信仰による義認のメッセージであった。第三の天使は1844年に、そして再び1888年に到来したが、いずれの場合も退けられた。しかし、その二つの事例はいずれも、後の雨の時に第三の天使が到来することを型示している。1844年は9/11の象徴であり、もし1863年が日曜法を型示しているのであれば、「いつまで」という象徴で表される「9/11から日曜法まで」の預言的期間は、十三節の「いつまで」という問いに対する現在の真理の答えを表すことになる。

1842年から1850年にかけてのミラー派の歴史は、1844年から1863年にかけての第三の天使の試練の預言的期間と重なり合う預言的な期間である。1842年から1863年にかけて、9/11から日曜法に至る歴史を示す預言的な道しるべがある。日曜法の時、キリストはまずご自身の教会を、次いで十一時の働き人を清めて、ご自身の宮を清める。そのとき、キリストは世界に旗印として示すための清められた民を持ち、教会は勝利の教会となる。その時点で主の聖所は清め終わっている。

私たちは「いつまで」という象徴を所定の位置に据えましたが、もちろんほかにもあります。これと前の五つの記事をヨエル書のレンズに戻していきませんが、こうした寄り道も位置付けておくことが重要に思われました。私たちが検討してきたすべての「いつまで」の証言は、十四節でパルモニが答えた「いつまで」という問いと一致しています。というのも、聖所は9/11から日曜法に至るまで清められることになっているからです。その歴史は後の雨の歴史であり、後の雨の歴史はヨエル書に示されています。